存在の光を求めて

存在の光を求めて

―ガブリエル・マルセルの宗教哲学の研究(I)―

小林　敬　著

創文社

小林 敬（こばやし・けい）

1957年，神戸市東灘区に生まれ，兵庫県西宮市に育つ．
1980年，関西学院大学文学部仏文学科を卒業．（学士論文テーマはカミュ．）同年，専攻を仏文学から哲学に転じて，大学院修士課程に進学．
1982年，修士課程修了．（修士論文テーマはマルセルの「参与」の概念について．）同年，引き続き博士課程進学．
1985年，博士課程単位修得・満期退学．その後，同じ関学文学部に「研究員」として在籍する傍ら，非常勤講師として大阪女学院短大，関学社会学部その他においてフランス語及び哲学・倫理学などを講ずる．
この間，1987年～89年の2年間，日本学術振興会の「特別研究員」として，マルセルの不安論を研究する．
1992年，北海道江別市の酪農学園大学・教養科に，哲学担当の専任講師として就職し，札幌市中央区に移住．（合わせて同大学及び小樽商科大学にてフランス語をも講じつつ，現在に到る．）
現在，日本宗教学会，日本基督教学会，日本仏語仏文学会等の各学会に所属．又，信仰面では，日本基督教団・池田五月山教会（大阪府池田市）において受洗し，北海道転居とともに，同教団・札幌教会（札幌市中央区）に転会し，現在に到る．

〔存在の光を求めて〕

一九九七年二月二〇日　第一刷印刷
一九九七年二月二五日　第一刷発行

著者　小林　敬
発行者　久保井浩俊
印刷者　藤原　輝

発行所　株式会社　創文社
102　東京都千代田区麹町二―六―七
電話　〇三―三二一六三―七一〇一
振替　〇〇一二〇―〇―九二四七二

（著者との申し合せにより検印省略）

藤原印刷・徳住製本

ISBN4-423-30097-4　Printed in Japan

まえがき——この本の出版の経緯と構成の概要——

この書物は、二〇世紀フランスに生きた哲学者・劇作家、ガブリエル・マルセル（Gabriel MARCEL, 1889-1973）について、その思想とキリスト教（カトリック）信仰とをめぐって、私なりの解釈を施しつつ、その一側面を論じようとするものである。

本書の原型となったものは、私が大学院修士課程を修了して以来現在に到るまで、主にこのマルセルを中心に、述べてきた所の諸論文である。一巻の図書としての全体のまとまりを配慮して、記述や表現に必要な補正を加えた事を別にすれば、本書の基本的内容は、まさにこれらの論文の趣旨をそのまま生かしたものである。それら諸論文については、それぞれの執筆の時点においてすでに、いつかは論集などの形でまとめて出版したいという希望が常に念頭にあった。そうした中で一九九四（平成六）年、恩師武藤一雄先生——あとがきに記すように、私は京大における武藤一雄の門下生ではなく、ご本人としては二度目の職場である関西学院でご指導を受けたのだが、先生は私のかけがえのない母校を、京大に劣らず愛して下さった——のご紹介を賜り、創文社及び代表の久保井正顕氏の知己に与るようになり、やがてはからずも文部省からの出版補助の受給を認められる幸運に助けられて、こうして一巻の書物の形を取るに到ったものである。従ってこれは、図書としては私の、いわゆる処女出版である。

「そもそもマルセルとはどういう人か？」こう問われる事が多い。上述の如く本書は基本的に「マルセル研

究」のいくつかの報告の総括であって、最初から「マルセル概説」を意図したものという訳ではない。もちろん論述の過程で、もし基本的なマルセルの人生と思想についての概要に言及する必要が特にあれば、それについても適宜触れてきたつもりではある。しかし本書中には、主題的に「マルセル紹介」それ自体を目的とした項目が立てられている訳ではない。そこで、それに代えて広く読者各位の便宜のため、或いは本文中の註に明示した引用・参照文献と重複するかもしれないが、別に「マルセル紹介のための文献」を巻末に掲げておきたい。

「なぜ、マルセルか?」これも又よく耳にする問いである。実は「どう答えればよいのだろう?」と、最も悩むのが、この問いである。最も本心に近い答え方としては、ちょうど「そこに山があるから登るのだ」と喝破した登山家と同様、「たまたまマルセルと出会い、それに惹かれたから」、としか答えようがあるまい。

ガブリエル・マルセルに限らず、そもそも誰か一人の内省的な思想家——作家や芸術家もそうだろうが——について主題的に学ぶ、という事は、多くの技術的な自然科学や計量的な社会科学のように、「何らかの研究対象を取り上げるべき何らかの客観的理由付けを明言しうるが故にその対象に取り組む」という順序で学び始められるものだろうか? まずその人物と自己自身との(我-汝的な)「出会い」から始まり、(客観的な)「評価・批判」はその結果として後から付いてくるものではなかろうか?

これとは逆なようで似た感を覚えるエピソードを思い出す。かの野田又夫教授(実は武藤先生の少し前に京大から関学に来られ、私も学部在学中一つだけ講義に出た事があるが、分野の違いもあって特に私淑させて頂くには到らなかった)の著述の中(中央公論社『世界の名著』第二七巻所収、「デカルトの生涯と思想」参照)で読んだ話に、「先生とデカルトの『出会い』は何ですか?」と聞かれた野田教授は、そもそも「出会い」という「実存」的な概念は、やはり「実存」的なパスカルやキェルケゴールについて勉強している人に関しては通用するかもしれな

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

いが、「明晰判明な理性による認識」を主眼とするデカルトを勉強する人間にとって、彼と自分の「出会い」などを問われても全く場違いだ、と困惑されて、ただ「デカルトに『出会い』などはなじまない」とのみ答えられたそうである。ここでデカルトとは正反対の、まさにパスカルやキェルケゴールの側の「同類」であるマルセルに関しては、こちらは逆に「出会い」以外のなにものもないのだから、野田先生の言を逆にして「マルセルに『研究ノ意義及ビ目的並ビニソノ理由』などはなじまない」、とでも答えるしかないかもしれない。

それゆえここでは、私がマルセルに「いかにして出会ったか」についてのみ答えたい。もっともこれも一言では語り尽くせぬものがある。ただ、これはいつも機会があれば語る事だが、学部時代はフランス「文学」の専攻学生としてアルベール・カミュを学び、その過程で思う所あって仏文科の「上」ではなく哲学科という「斜め上」の院生になるに到った私は、さすがにカミュの小説を哲学の修士論文のテーマにはできまいと考えて一時はジャン-ポール・サルトルの研究をも試みたのだが、ここでどうしても出てきた書き手たるサルトルと読み手たる私の葛藤、特に私のキリスト教（プロテスタント）信仰に起因する葛藤の中で、たまたま「研究上の参考文献のひとつ」にするつもりで読んだ『人間の尊厳』（*La dignité humaine*）の著者が、それまで哲学史的知識として「名前と傾向ぐらいは知っていた」だけのガブリエル・マルセルだったのである。そこでの私の思いは、「自分が思ってはいても表す言葉を見出せなかったような事を、自分に何十年も先んじてすでに言ってくれてた人がいる」、という親近感であった。書物に媒介された間接的な出会いではあるが、実際に顔と顔を合わせての直接的な出会いに例えれば、「初対面からこの人とは、妙にウマが合いましてねえ……」、という所だろうか。それ以降、修士論文執筆・博士課程進学を経て今日に到るまで、「この人と私との親交」はずっと続いている。

そういった「親交」を続ける中で、特に私が慨嘆させられてきた事は、「生前、時代の流行の如く、あんなに

もあちこちでその名が語られてきた人を、その死後わずか十年あまり（現在では二十年以上）にして、ほとんど誰も顧みなくなってしまうなんて！」という思いであった。しかし逆にいえば、そのような慨嘆が、逆に「せめて誰かがこの人の事を語り伝えてゆかねばなるまい」という思いに転じ、それが又私をして、研究仲間の極めて少ないマルセル研究に、まるで意地を張る如く、ずっと取り組み続けさせる原動力ともなったといえる。「研究者が少なくなってしまったからこそ、続けて伝える者が必要だろうし、又それだけの価値のある思想家だと信じる」という本書の出版補助申請のため文部当局に提出した「公式文書」の記載も、同時に又どうしても「書かずにはいられなかった」偽りなき思いを表したものでもある。

思うにことマルセルに限って、先のような「なぜ、マルセルか？」との問いが多く出されるのは、ひとえに今述べたような知名度の低さの故だろう。例えば、「なぜ、カントか？」とか「なぜ、プラトンか？」と聞かれる事は、おそらくまずあるまい。しかし私の場合上述したように、かく知名度が低い事自体が逆に、マルセル研究を継続する要因となったといえる。「なぜ、マルセルか？」の問いに対しての私の逆説的な回答は「そのようにお聞きにならなくてもよくなるように、と切に願うからです」、というべき所かもしれない。

さて本書の内容についても、最初に若干の事柄を述べておこう。先述のように本書は、基本的に独立して執筆された諸論文を原型としており、その限り本書一冊が全体として例えば仮説から論証を経て結論に到るというような、一つの体系に従って構成されている訳ではない。この点で今の私の思いも、或いは『形而上学日記』(*Journal métaphysique*) を「日記」の体裁のままで出版した時のガブリエル・マルセルのそれに似ているのかも知れない。私も又、無理に何らかの体系の形式を整える事によって、一つ一つの主題について論じてきたその

時点の生きた関心を損なう事を恐れるからである。とはいえ逆に、「体系自体が悪しきものだ」というのも、これは知的省察それ自身の自殺行為となろう。マルセルが嫌ったのも「体系のための体系」であって、決して「反体系のための反体系」を唱えたのではない。本文中にも記しているが、私の視点も或いは「非体系的なマルセル哲学から、いわば『隠れた体系』を見出す」方向に向いているのかもしれない。

その意味で本書も、固定的な体系においてでこそないが、単に執筆年代順に各論文を並列するのでもなく、全体を俯瞰しての一定のゆるやかな「まとまり」乃至「見取り図」を設けるため、共通するテーマごとに全体を四部に分けた。

第一部は主にキリスト者としてのマルセルについて、神を信じないカミュやサルトルとの対比のもとに、述べたものである。それに続いて第二部では、マルセル思想の基礎を語る意味で、マルセル哲学の根本概念群の一つ「問題と神秘」の対概念を中心に、又その対概念に依る彼の思想の一つの当然の帰結としての彼の「神の存在証明」に対する態度の表明をめぐって、論じられている。

ここまでに述べるような彼の宗教的な哲学は、キリスト教自体に関与するプロパーな神学と、あくまで区別されるべき事を特に強調した上で展開されているのだが、続く第三部ではこの点を手がかりとして彼の哲学の特質——先に書いておけば、筆者はこれを「前・神学的」特質と名付けたい——を掘り下げるべく、彼の思想と共通する内容を異なる方法——むしろ「神学的」方法——を取って述べた他の思想家——先人の中からパスカル、同時代人の中からブーバー——に対比して論じたものである。あわせてマルセルとプロテスタンティズムとの接触についても、ここで論じてみたい。

最後の第四部では、彼のかかる「前・神学的」宗教哲学が、固有の神学や一般の哲学に劣らず大いに証言した

所の、超越的・究極的目標――彼の表現によれば「実存に出発して、向かう所の目当てとしての存在そのもの」――に迫るいくつかの道のうち、これまであまり多く取り上げられてこなかった、「人生の悲劇的要素」としての「不安」の概念を通る道を取り上げ、もって彼の「実存から存在への道」を素描してみたい。

各部はさらにいくつかの篇に分かれているが、これが元来本書の原型になったそれぞれの論文が改稿されたものである。註は各篇ごとに付され、参考文献等はこの中に明示されてある。各篇はさらにいくつかの章に分かれ、若干の章には、さらに節に分かれているものもある。論旨をより明らかに提示するべく、部、篇、章、節のすべての段階に見出しを添えておいた。不十分かもしれないが、多少なりとも読者諸賢のご参考となれば幸いである。

なお、本書の出版にあたり、平成八年度文部省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けた。

マルセル著作略号一覧

参考文献などはすべて註中に明示したが、頻出するマルセル本人の著作については、次の略号で表示した。本表ではABC順に提示する。尚、参照便宜のため、全集などに邦訳のあるものを併記する。

CQE *En chemin, vers quel éveil?*, Gallimard (Paris), 1971.（邦題『道程――いかなる目醒めへの？――』：服部英二訳、理想社（東京）、一九七六年。）

DH *La dignité humaine*, Aubier (Paris), 1964.（邦題『人間の尊厳』：『マルセル著作集』第八巻所収、三雲夏生訳、春秋社（東京）、一九六六年。）

DS *Le déclin de la sagesse*, Plon (Paris), 1954.（邦題『知恵の凋落』：前掲著作集第六巻所収、小島威彦訳、一九六七年。）

EA *Être et avoir*, Aubier, 1935.（邦題『存在と所有』：前掲著作集第二巻所収、渡辺秀等訳、一九七一年。）

ERM *Entretien Paul Ricoeur-Gabriel Marcel*, Aubier-Montaigne (Paris), 1968.（邦題『《対話》マルセルとリクール』：三嶋唯義訳、行路社（京都）、一九七九年。）

FPh *Fragments philosophiques*, Nauwelaerts (Paris/Louvain), 1961.

HP *L'homme problématique*, Aubier, 1955.（邦題『人間、この問われるもの』：前掲著作集第六巻所収、西村嘉彦及び福井芳男訳、一九六七年。）

HV *Homo viator*, Aubier, 1944.（邦題『旅する人間』：前掲著作集第二巻所収、渡辺秀等訳、一九七一年。）

JM *Journal métaphysique*, Gallimard, 1927.（邦題『形而上学日記』：前掲著作集第一巻所収、三嶋唯義訳、一九七

三年°)

ME I *Le mystère de l'être, Vol. I, Réflexion et mystère*, Aubier, 1949.(邦題『存在の神秘』:前掲著作集第五巻所収、松浪信三郎及び掛下栄一郎訳、一九七七年°)

ME II *Le mystère de l'être, Vol. II, Foi et réalité*, Aubier, 1951.(邦訳同上巻所収°)

PA *Position et approches concrètes du mystère ontologique*, 2° édition, Nauwelaerts/Vrin (Paris), 1948.(邦題『存在論的秘義の提起と、それぐの具体的な接近』:前掲著作集別巻所収、三雲夏生訳、一九六六年°)

PI *Présence et immortalité*, Flammarion (Paris), 1959.(邦題『現存と不滅』:前掲著作集第二巻所収、信太正三等訳、一九七一年°)

RI *Du refus à l'invocation*, Gallimard, 1940.(邦題『拒絶から祈願へ』:前掲著作集第三巻所収、竹下敬次及び伊藤晃訳、一九六八年°)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目　次

まえがき
マルセル著作略号一覧

第一部　実存から信仰へ

第一篇　カミュの無神論について……五
はじめに　ただ神を「信じない」だけか？……五
第一章　『ペスト』以前に見る「非合理な神」……七
第二章　『ペスト』に見る「暴君」としての神……一一
第三章　カミュは「二〇世紀のヨブ」か？……一九
おわりに　「贖罪」の欠如……二三

第二篇　サルトルの無神論について……三一
はじめに　神など「どうでもよい」のか？……三一
第一章　『存在と無』に見る「即自にして対自」なる神……三三
第二章　自伝『言葉』に見る「宗教の代用品」……三八

第三章　「代用の神」はサルトルを救ったか？……四四
おわりに　「神なきクリスチャン」の遺産……四八
第三篇　マルセルの回心をめぐって……五三
はじめに　カミュでもなく、サルトルでもなく……五三
第一章　神の予感……五四
第二章　神への回心……五九
第三章　「哲学」か？「神学」か？……六二
第四章　「前神学」的な哲学として——むすびを兼ねて……六七

第二部　信仰と哲学

第一篇　「問題」と「神秘」……七七
はじめに　マルセルは「神秘主義者」ではない……七七
第一章　「問題」の概念……七九
第二章　「問題」の限界——「私がある」ということ——……八二
第三章　「超問題」即ち「神秘」の概念……八五
第四章　「神秘」と「反省」（第二次的反省）……九〇
おわりに　「啓示」への接近……九五

第二篇　「神の存在証明」を超えて……一〇三
はじめに　回心者マルセルはスコラ的立場に転じたのか？……一〇三
第一章　マルセル回心時の背景――トマスからマリタンまで……一〇三
第二章　マルセルの立場（一）――「証明」とは何か？……一〇七
第三章　マルセルの立場（二）――「神」は証明されうるか？……一一〇
第四章　マルセルの立場（三）――なぜ先人は「神」を証明せんとしたか？……一一三
おわりに　「自然」と「恩寵」の間……一一九

第三部　「前神学」的な宗教哲学

第一篇　パスカルとマルセル……一三一
はじめに　「自分で思っているよりも近い……」……一三一
第一章　「人間の本性」……一三三
第二章　「救済の希求」……一三九
第三章　マルセルは「護教論」を避けるのか？……一四四
おわりに　方法の相違を超えて……一四八
第二篇　マルセルとブーバー……一五六
はじめに　「我－汝」論の二人の提唱者……一五六

第一章　「我」と「汝」……一五七
第一節　マルセルの場合……一五七
第二節　ブーバーの場合……一六二
第三節　「根源語」と「神秘」……一六六
第二章　「絶対の汝」・「永遠の汝」……一六八
第一節　マルセルの場合……一六八
第二節　ブーバーの場合……一七二
第三節　「神学的」なブーバーと「哲学的」なマルセル……一七五
第三章　ブーバーに比べてのマルセルの「前神学」的傾向……一七八
おわりに　地上の「汝」と天上の「汝」との類比あるいは相補性……一八二
第三篇　マルセルとプロテスタント信仰……一八八
はじめに　再び「回心」をめぐって……一八八
第一章　幼児期のプロテスタント体験……一九〇
第二章　成人後のプロテスタント体験……一九三
第三章　なぜプロテスタントとはならなかったのか？……一九六
第四章　カトリシズムだけしか認めなかったのか？……二〇三
おわりに　教派を越えた宗教哲学者……二〇五

第四部　存在の光を求めて

第一篇　「不安」と信仰……二二四
はじめに　「不安」の概念自体の検討に先立って……二二四
第一章　『形而上学日記』における「不安」の概念の形成過程……二二六
第二章　『存在と所有』における「不安」の概念の形成過程……二三一
第三章　『存在と所有』から *Position et approches*……への発展と「不安」の概念……二三四
おわりに　次篇のためのまとめとして……二三八
第二篇　「苦悩」と「不安」……二三三
はじめに　前篇を受けて――一九五五年テキストにおける「不安」の概念の確立――……二三三
第一章　「苦悩」と「不安」……二三四
第二章　マルセルが見た「不安」と「苦悩」の思想史……二三五
第一節　近世以前＝「不安」とその救い……二三六
第二節　近世以後＝滅びに到る「苦悩」……二三九
第三章　マルセルが見た同時代の「不安」と「苦悩」……二四四
第四章　「不安の許容／苦悩の断罪」だけなのか？……二四七
おわりに　存在の光を求めて……二五一

初出一覧……二六〇
マルセルについてもっと知りたい方のために――マルセル紹介文献一覧――……二六二
あとがき……二六五
索引（人名・事項）……1～4

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com